

# 鹿沼に生きた人 生きている本

第2号

～鈴木石橋・その1～



鈴木石橋肖像

2020年4月

小さな旅クラブ 鹿沼

① は？

ふるさとに咲く——鈴木石橋の生涯——

はだかに戻ってくる

鹿沼の町の東を流れる黒川は、ふりつづいた五月雨きみだれをあつめて、濁った水は渦をまきながら、矢のように流れていた。

いつも、子供たちのあそび場になっている河原も、水にかくれて見えない。河原ばかりでない。かかっている筈の橋も見えない。水がふえて、流されてしまったのだ。

いそぎ足で、川岸まできたひとりの旅人は、立ちどまると「やっつ」といった。

「これはこまったなあ」

しばらく水のおもてを見つめていたが、うなずいた。

「そうだ、御成橋へいこう。先生のお宅へはすこし遅くなるが」

旅人は土手に沿って、足を早めてあるきだした。

心はせく。

しばらくあるいて、はっと川上を見ると、ばったり立ちどまって、また大声をあげた。

「やっやっ、やあ、これは——」

そこには橋の影もなかった。やはり流されてしまったのである。

旅人は岸に立って、また流れに見入った。

水はおどるように、狂うように、こうごうと音を立てて、流れきては流れ去る。

じっと見ているうちに、旅人の心も、その水のように、おどって、狂って、波立ってきた。ごうごうと音を立てるほど高鳴ってきた。もうたまらなくなった。

「ようし」

旅人はわらじをぬぎ、脚胖をぬぎ、股引をぬいた。つづいて、ぐるぐる

と着物をぬいで、みんな丸めてくくると、首へまきつけた。

まっばだか！

どぶん！

まげにゆったその頭は、もう流の中に浮かんでいた。

水は怒ったように、どうっと、上からかぶさってくる。目をあいていられない。と、うねりのような大きな波がおそいかかって、からだじゅうを木の葉のようにゆすぶる。いくら手足をうごかしても、前へ出ない。

「なに、くそつ、こいつめ！」

旅人はおこった水をおこりつけた。

やっと向岸へあがると、目の前に、町の通とおりが一筋につづいている。

「もう、一本道、ひと息だ！」

思うと、なずかしさは急にはげしくなって、旅人は何もかも忘れた。じぶんがはだかであることも忘れてしまった。

着物を首へくくりつけたまま、どんどん走りだした。

御成橋町から泉町、戸張町、上材木町、天神町、仲町、石橋町。

その間を、旅人は夢中で走りつづけた。

おどろいたのは、町の人たちだ。

「何だ、あれは」

「どうしたのだ」

「ばかか」

「気がいか」

旅人はそんな人たちには目もくれない。一気にかけてかけつけた石橋町の一軒の邸の門の中へ——ちょうど、さつき川の中へとびこんだような勢いでとびこんだ。とびこむと、ありったけの声を出した。

「先生！ 君平くんぺいでござります！」

しんとしてへんじがない。

いよいよ声を張りあげた。

「蒲生君平でござります！ 石橋せつきょう先生、鈴木石橋先生！」

と——障子のむこうで声が出た。

「おお、君平か」

その声を聞くと、君平はがばっと、そこへ平伏して、両手をついた。

ああ、その声は——。一刻も早く聞きたいと思ってとんできた先生の声だった。

「はっ」といった君平は、全身がかつとあつくなつた。

「急にお目にかかって、お話いたしたいことができまして、大いそぎで戻ってまいりました」

「ふむ、何用じゃ」

いいながら障子をあけた石橋先生がふと見ると、そこには、はだかの君平がひざまづいているではないか。

「おお、いったい、どうしたのだ」

「はっ、どうもいたしませぬ、このように元気でござります」

「だが、お前の姿はどうしたことだ」

「はっ」

「着物はどうした」

「はっ」

きよろきよろ見まわした君平は、じぶんがはだかであることに気がついた。

「はっ、先生、これは、先生、何とも、先生っ、おゆるし、おゆるしを……」

「どうしたというのだ」

「はっ、黒川の橋がみな流れてしまいましたので、川を渡ってきましたが、あまりいそぎましたので、つい、着物をきることを忘れまして……」

「どうしてまたそんなにいそいだのじゃ」

「はい、先生、どうしても先生のお耳に入れて、お考えを伺いたいことがござりまして」

「何事だ、兎に角着物をきて、こちらへあがったらよかろう」

「ははっ」

先生は玄関からおりてきて、弟子の手を取った。

## わかってくれる先生

蒲生君平の名は、林子平、高山彦九郎と共に「寛政の三奇人」としてうたわれた。

当時は徳川幕府時代で、あちこちにある歴代天皇の御陵墓が荒れ果てたままになっているのを慨いた君平は、<sup>なげ</sup>実地踏査を思い立って、まず京都附近からはじめて、中仙道をまわり、越後へ出て、佐渡カ島へ渡った。そこには、承久の昔、北条義時のために島流しにされておかくれになった順徳上皇の御陵がある筈だったからである。

ところが、どこにあるのか、場所もわからない。道行く人に聞くと「そんなものがあるか」と、あべこべにふしぎな顔をして聞きかえされるくらい。やっとたずねあてたところには、痩せた松の木がひよろひよろ立って、草が茫々とはえているばかりだった。

「おお、これは何という有様！」

お墓ともわからぬ墓前にひれ伏して、悲憤の涙にむせんだ君平の心に、まず思い出されたのは、鈴木石橋先生だった。

「そうだ、一度鹿沼へかえって、先生にお目にかかろう。そうしてそのことを詳しくおはなししよう。思えば、先生が順徳上皇のお話をなされた時、いつものやさしいしずかな御様子にひきかえて、声を励まし、拳をにぎり、涙ぐまれたとさえ思われた。そうだ、一日も早く」

そう思うと、一刻もぐずぐずしてられない。昼夜兼行で、久しぶりに故郷の下野へかえってきた。しかし生まれた宇都宮は<sup>すどお</sup>素通りして、ただ鹿沼へと志ざしたのだった。

「石橋先生に遇いたい、話したい」

そのことだけで、君平の心はいっぱいだった。それほど、その先生は、その弟子に取って、親しい、なつかしい、尊とい——それ以上に、じぶんの心の底の底までわかってくれる先生だったのである。

よい父、よい家、よい頭

日光と栃木の間にあった鹿沼は、徳川時代には、皇室から東照宮へのお使が通る例幣使街道の道筋にある宿場だった。

その旧家に大阪屋というのがあった。農業と共に雑貨を商<sup>あき</sup>なって、田畑の仕事には、多くの作男を使い、商売には番頭や手代を置き、当主の鈴木三郎兵衛は家業にも熱心だったが、修養も怠らなかった。読書が何よりのたのしみで、たくさんの蔵書をもっていることと、易学<sup>えきがく</sup>に詳しいので有名だった。

2人の男子の子が生まれたが、長男早く世を去ったので、父母の愛は次男の四郎兵衛にあつまった。ところが、母親のきよ子は、この児が五才のかわいい盛りになった時、身まかった。

父親は自分みずからの手で、このひとりの児を教育しようと決心して、妻を迎えなかった。それにおばあさんの美代子は、母のないこの子を、人一倍かわいがった。

この世で、生みの親を早く失なうということは、最大の不幸であるが、四郎兵衛少年はこの一つの不幸のほかは、恵まれていた。血統はよいし、財産はあるし、父親はりっぱだし、おばあさんは、愛が深いし、家庭は教育的だし、すべてが備わっていた。彼はこういう環境の中で、すくすくと育っていったのである。

大きくなると共に、学問も進み、鍛練も加わり、勉強の態度もしっかりして、天晴れの青年になったことはいうまでもない。彼の指導に当たっていた母親の兄である伯父の鈴木与右衛門も、その発達ぶりには舌を捲いていた。

「四郎兵衛は、もう、わしの手にはおえなくなった」

そこで、四郎兵衛の心に、新しい考えが湧いてきた。

彼と父親の間に、こんな会話がかわされた。

「お父さん、鹿沼では、私はもう習うことがなくなりました。けれども、私はもっと学びたいのです。どうぞ、江戸へ出してください」

「ほう、江戸へ、——どこへはいるか、考えたか」

「どうせ、はいるのでしたら、一番の昌平校へはいりたいと思います」

「ほう、昌平校へ。——なるほど、よくいうた。実はこのわしも、江戸へ出て修業をしたいと、どのくらい思ったか知れないが、家業の都合や何かで、とうとう果たされないでしまった。それをお前がやるという。よろしい。お父さんの分までやっておくれ」

父親は理解があるし、財力は充分だし、この大問題は問題なくきまってしまった。その上、彼自身に実力はそなわり、熱心は加わったので、滞りなく入門もできて、最高学府に籍をおくことになったのである。24才の春であった。

### 日本一の学者になるか

昌平校における四郎右衛門は「勉強のかたまり」であった。どんなことがあっても、勉強だけはけっしてやめない。

療癒るいれきわずらって、半年もなやんだ。痛みがひどくて、あるくのは勿論、起居たちまで不自由した。けれども、その間、一日も、読書をやめたことがない。

足をそろえることができない。横さまに投げだして、肩はゆがみ、からだはまがった。机へぶらさがっているような格好かっこうだった。額からあぶら汗がだらだら流れて目にはいる。ぱちぱちとまばたきして、頭をふっては、本に見入る。時にははげしい痛みがおそってくると、投げだした足はびくびくとうごく。

「ううっ……」

思わずうなりが口から洩れる。けれども歯をくいしばって、やはり、本から目を離さない。

もし「勉学」ということを絵にしたら、四郎兵衛のこの時の有様こそ、それであったろう。

だから、学業はどんどん進んだ。

26才の時、伊勢へ旅行して、大廟へ詣った際の事件と感想を綴った「伊勢紀行」という一文は、同門の人々の間に評判になり、先生たちも目をみはった。翌年27才で、遂に仰高門ぎょうこうもんの講授に挙げられ、教えられた身は、早くも教える地位にすわった。その躍進ぶりは、まことに目ざましいもの

であった。

このままで進めば、やがては江戸第一の学者の中に「鈴木四郎兵衛」という名を見出だすようになることは、知っている誰もが期待した。江戸第一の学者になることは、即ち日本で第一流の学者になることである。彼の前には、その道が大きく開けてきたのであった。

### 故郷鹿沼の先生になる

ところが、四郎兵衛は名声と榮譽に満ちたその道をゆかなかった。かえて、目立たない、狭い道を選んだ。突然、仰高館の講授を辞して、故郷の鹿沼へかえてきたのである。天明元年、28才の時であった。

どうして、そういう道を取ったのだろうか。

その頃、天下の形勢は次第に険悪になってきた。前年には、関東に大洪水があり、その年には江戸に大火があり、信濃や上野では百姓一揆いっきがおこったりして、人の心はむやみに昂奮したり、やたらに失望したり、このままほうっておけば、えらい事変にもなり兼ねないきざしがあらわれてきたのであった。殊に生活状態がわるく、しかも広く世の中のことがわからない地方では、そういう危険は一層甚だしかった。

四郎兵衛は早くもこのことを感じたのである。そうすると、まず心に湧いてくるのは故郷である。

浮足立っている人心に、磐石ばんじやくのおちつきを与えるものは何か？世の中のうわさや、さわぎに動かされず、ぶつかる苦難や、災害にひるまず、守るべきものを守り、なすべきことをなす信念である。それならば、その信念を与えるものは何か？教育である、修練である。わが郷土にこれを与えなければならぬ。衣食住を与えるのと同じに必要な大切なことである。それならば、誰がそれを与えるか？

ここまで考えてきた四郎兵衛の心は、江戸から飛んで、鹿沼に向かったのである。自分一人の立身出世よりも、郷土の多くのものと共に生きようという決心が、彼の胸いっぱいにあふれてきたのである。

かくて、昌平校の主任になれる身の鈴木四郎兵衛は、麗沢りたくの之舎の主人と

なったのである。

「麗沢之舎」とは、彼が鹿沼で開いた塾の名である。そうして自分の号を「沢民」と呼んだが、住居が石橋町にあったので、別の号を「石橋」といった。



当時は、前にもいったように、一般に不安がはびこっていた時代だったから、読書につとめ、修徳に志ざすというようなことはおろそかにされていたので、はじめはわずかな入門者しかなかった。

しかし、石橋先生は2人に対しても、5人に対しても、10人に対しても、同じ熱心と、親切と、努力をもって臨んだ。それに加えるに、高潔な人格と、深遠な学識が裏づけられているので、一度でも、まじめに触れ、接したものは、魂の底までゆりうごかされることを感じないわけにはいかなかった。

おのずから、その名はそれからそれへと語り伝えられ、日に日に入門者は増して、数十人を数える盛んな有様になったのである。

入門する弟子は、先生の家へに寄宿する内弟子、自分の家から通学する外弟子、文書の往復によって指導を受ける通信弟子の三種類があった。学課は先生による四書五経の講義で、そのほか弟子同志で順番に講じ合ったり、お互いに読み合ったりする輪講、会読も行われた。先生から詩や文章の題を出されて、めいめいが作ったものを、添削してもらうこともあった。

麗沢之舎が開かれると、一番早い内弟子として入門したのが、宇都宮出身の蒲生君平であった。

先生は君平をどのくらい愛したか。また君平は先生をどのくらい慕ったか。旅行先からよくたよりをよこした。そうして、時には、自分のはだかなことも忘れてとんできたのである。彼は前にいったように、方々の御陵墓をめぐって、有名な「山陵志」という本を著したが、それには石橋先生がかげにあって、非常な力を入れたことはいうまでもあるまい。

通信弟子の中では、佐野在越名の須藤仲比次や、外弟子の中では、町の島文翼などが、すぐれていた。

「用うべきものの第一人者」

先生は、文翼のことをそういった。

### 石橋さまは<sup>ほとけ</sup>仏さま

先生が心配したことは、果たしてほつほつあらわれてきた。

天明元年のその年は、作物の出来がよくないので、不安はいよいよ募ったが、翌2年は、春から夏にかけて雨がふりつづき、諸国に洪水がおこり、南方の海岸は海嘯に見舞われ、関東は大地震におそわれ、つぎの年には浅間山が爆発し、殊に奥羽地方は凶作だった。遂にあちこちに餓えて倒れるものが出てきて、全国的に恐ろしい飢饉がやってきたのである。

先生は父と相談して、まず自分から50両を提供し、町の豊かな人たちを熱心に説いて、40余名から寄附を得て、困った者に分けてやった。

それが初めて、それからはひきつづき、窮民を賑わすことに心を砕いた。寛永元年には米を買いあつめ、公共の郷倉を作って貯わえた。それで同3年に、大風大水のため、ふたたび飢饉状態におちいった時は、1戸に1斗の米と、300文の金とを与えたが、その金は、先生が自分で出したものであった。それを手にしたものは、ほんとうに「地獄で仏に会う」思いがした。

「石橋さまは仏さま」

そうって、みんな涙にむせんでおしいたがいたのである。

そういう非常な時や大変な場合の救済のために努力したばかりでない、特別な事件がおこらない普通の時にも、先生の目は、貧しいもの、あわれなもの、困ったものから、けっして離れなかった。機に臨み、時に応じて、さまざまなものを、いろいろな人たちに分け与えた。それを控えた「賑窮簿」には、このように書かれてある。

「一、古綿入一つ 金七母。一、同一つ 米五升 助六。一、同一つ、米勘五郎坊。一、米五升 如来道の与八」

これは一人に一度ではない。毎月、または夏冬のかわり目に、くりかえしくりかえし施された。そのおかげで、餓えず、こごえず、生活することができたものは、500人以上とかぞえられた。

### 棄児の引受けどころ

朝は寒く、まだ暗い。

便所から出て、廊下づたいに寢間へかえろうとした石橋先生は、立ちどまって耳を澄ました。

ふと、声が聞こえたからである。

オギャア……

かすれた声である。途切れてはまたつづく。

オギャア……オギャア……

「赤児の泣きごえ」

そう思った先生は、いそいで部屋へはいると、着物をきて、足袋をはいた。

雨戸をあけて、庭へ出た。凍りつくような夜明けの風に、思わずぶるぶるっとふるえた。声は風にふき消されたように、ぱったりやんでしまった。

「おやっ」

しばらく立ちつくす。

オギャア……

かすかに聞こえた。

裏木戸の方だ。

しずかに木戸を押すと木の下<sup>したやみ</sup>闇で、よく見えない。

オギャア…… オギャア……

声をたよりに、腰をまげて、すかすようにして近よると——あった。ぼろきれでぐるぐるつつんで、<sup>わらない</sup>藁縄でくくってある。もし顔が出ていなかったら、小さな丸い荷物がころがっているとしか思えないだろう。すかしてみると、この寒さに、もう息も絶え絶えの有様で、時々やっとな声が出てくるのである。

「やっ、これは！」

思わず声をあげた先生は、いきなり両手を出してだきあげた。

「おお、よしよし」

氷の玉をかかえるようにつめたいのも感じないで、軽くゆすぶると、いそいで家の方へあるきだした。

「おい、また、赤ん坊が授かったよう」

家へはいると、大声で叫んだ。

「ははっ」

「まあまあ」

「それはそれは」

あちこちの部屋から声が入り、みんな寝巻姿のまま出てきた。

「はい、私が」

だき取った夫人は、

「まあ、つめたい。あたためてやらなくては」

女中の方をむいていった。

「はやくお湯をわかして」

夜明けにふいにおとずれたひとりの赤児のために、家じゅうのものが起きだしてはたらきだした。

その頃はどこでも、たべものは足りない上に物価は高いので、子供が生まれても育てられない。それで棄児が多かった。先生はこれをあわれんで、出来る限り自分のところへ引取った。寛政2年には、16人もひろいあげた。ただひろいあげ、一時引取るだけでない、ずうっと大きくなるまで世話して、一人前に仕上げた。

だから、先生の家には、いつも幾人かの赤児が、泣いたり、笑ったり、這いまわったりしていた。それは私設托児所であった。

夫人の磯子は、よく先生を精神を理解して、こういう面倒な仕事にも進んでたずさわって、賢夫人の聞こえが高かった。

## 宇都宮藩への出張講義

先生は、孝行の徳を重んじた。

常に、よく親につかえるものに注意して、それを聞きつけると、家へ呼び寄せたり、自分から訪問したりして、褒め、たたえ、励ましたが、そのうちで殊に感心した三人の事績を文章にして「三孝子紀事」という本も著わした。

だから、父三郎兵衛が永い眠りについた時は、3日間断食し、3年間酒を飲まず、肉を喫せず、烟草を吸わず、毎日、親子の道を教えた「礼記」を読みつづけてやめなかった。

こういう高い学徳と、深い温情と、汎い公共心と、三つを十分にそなえた人格は、おのずから著われないではなかった。ついに宇都宮藩主戸田忠翰侯の耳に届いて、こういう達があった。

「数年来、心がけよく、町内の風俗まで常に教諭行き届き、御満足に思召され候。依て五人扶持下され候。尤も折々登城仰せつける儀もこれあるべく候間、その旨相心得べく候」

程なく毎月3回、宇都宮城中で、講義することになった。

大広間の上段に、厚い蒲団が敷かれ、りっぱな机が置かれて、席が設けられると、家老、藩士、その子弟たちが左右に居並ぶ。やがて先生があらわれて、席にすわる。一礼すると、みんなの頭が一斉にさがる。満座、しんとして水をうったよう。そこでおもむろに先生の唇がひらいて、尊とい教えの数々があふれ出てくるのである。

先生は40代から軽い中風の気味で、多少足に不自由を感じたが、年と共にそれが募るので、出張講義の辞退を申出たが、藩公は惜しんで許さなかった。その代り、城中に一室を設けて、そこに住むようにし、その上、輦に乗って城門を出入りすることを許した。城門を輦で出入りするの、藩公か家老のほかは殆ど出来ないことで、全く破格の取扱いであった。

## 最後に完成した20巻

ある日、庭をあるいていると、突然、半身がしびれてきかなくなった。「ああ、これ、ちよっと」

先生はしづかに夫人を呼んで、<sup>たす</sup>扶けられて部屋へはいったが、これは中風が再発したので、以来、半身不随となった。

それからは、自分から「閑翁」と号して、家にひきこもった。けれども、けっして閑<sup>ひま</sup>なおじいさんにはならなかった。否、新しい忙しい活動がはじまったのである。不随のからだを机に寄せかけて、しきりに筆をうごかした。父三郎右衛門が易学を修めた後を継いで、その研究をまとめることをはじめたのである。筆がうごくにしたがって、次第に原稿紙はうずたかくなっていった。

こうして不便不自由と戦いながら、倦まず撓まず、5年の間つづけて、とうとう「周易象儀」20巻を完成したのである。

ちょうど61才だったが、それが終ると、病気は目立って重くなって、筆を執ることも困難になった。

文化12年2月25日、62才の寿をもって、石橋の寓居で、安らかに息をひきとったのである。

葬儀には戸田侯からは哀悼の使があり、会葬者は400人とかぞえられた。

### 花こそ咲き出ずれ

先生<sup>な</sup>亡き後も、その精神は、心あるものの胸の底に、いわず語らずのうちに生きて、鹿沼の里に其々の感化を及ぼしている。

死後100年に際し、その高風を慕うものが期せずして集まって、大正3年初夏、菩提寺雲龍寺において、盛大な「石橋先生百年祭典会」が催された。

更に大正13年2月、公益事業に貢献した功勞によって、正五位を贈られた。

同年6月、その奉告祭が行われたが、その際、和田保太郎校長の手に成る頌徳の歌が出席者一同によってうたわれた。

一、ひじりの御代の大御代の 恵みの露のしたたりて 鹿沼の里にうもれたる 花こそ今は咲き出ずれ

二、教えの道の世の人を 救わんわざにむらぎもの 心つくししそのか

みを 仰げば高しあなとうと

三、黒髪山のいや高く 黒川の瀬のいや清く とわに仰がんそのあとを  
とわに慕わんおもかげを

### 年譜

- 宝暦 4 年 鹿沼町石橋の里に生まる。  
安永 6 年 江戸昌平校入学。  
同 9 年 仰高校講授に挙げらる。  
天明元年 郷里鹿沼に帰り麗沢之舎開塾。  
寛永 12 年 宇都宮藩儒となる。  
文化 5 年 病のため半身不随となる。  
同 12 年 病歿。忌日 2 月 25 日。行年 62 才。



「大志に生きる——郷土にちなむ十五偉人——」

(上沢謙二監修・栃木県連合教育会編・昭和 28 年 3 月 10 日発行) より



② て。

### 蘭華第八号「鈴木石橋先生」

(栃木県立鹿沼高等女学校校友会・昭和 12 年 1 月 10 日発行)

#### ○先生鹿沼に生る

鹿沼が生んだ最高の偉人鈴木石橋先生が鹿沼に呱呱の声を発した時は徳川時代の中葉を過ぎた宝暦 4 年の事であった。「時代が人物を生む」という事が真であれば、宛も当時幕閣に田沼意次<sup>オキツグ</sup>あり、その身は側衆の低きを以て萬石の高きに列せられ、その実弟意誠<sup>オキノブ</sup>は三卿一橋家の家老に任じ、一門尽く枢職を占め、政務は渋滞し、賄賂は公に行われ、褒貶黜陟自在、幕政頓に弛緩し、漸く下剋上の氣風の醸せられた時代であった。竹内式部が尊王論の先駆となって幕吏に捕えられたのもこの時代の事である。

かくの如く邦家漸く多事ならんとするの秋、先生は鹿沼石橋の里に人となった。当時の鹿沼宿は例幣使街道に沿う栃木、今市間の要駅ではあったが、僅に南は鳥居跡、北は御成橋との間に二條の通りが南北に並び、東を田町通り、西を内町通りと称し、田町通りは例幣使の本街道をなしていた。現在の鳥居跡交番の分岐点から 250 間の所に木柵あり、北は上田町の木柵迄長さ 6 町 6 間、この道路の各々中央に何処の山麓町もそうであった様に幅 4 尺の用水路を通じていた。現存せる鹿沼



古地図中最古のものである正徳年間原図に天明年間加筆せるものによれば、田町通りは用水路の西側に 25 戸、東に 23 戸が数えられる。内町通りは現在の雲龍寺の南 100 間餘の所に木柵あり、北は上材木町と戸張町との間に同じく木柵ありて、その距離約 10 町 18 間、田町同様に引かれたる用水堀を界として西側に 54 戸、東側に 57 戸、その人家密度に於て田町通りに勝れている。其の他これ等二條の縦貫路を東西に結ぶ上横町と其の延長である宇都宮街道、下横町と同じく新町通り等全戸数を合して 201 戸の小宿駅である。先生もその勸学文中に「余が郷の下邑は実に弾丸の一聚落耳」と述べ、当時の鹿沼宿の貧弱さを記録している。現在の戸数約 5,000、人口約 25,000 の新興鹿沼の現勢に比すれば霄壤もたゞならざる相違に驚かされる。「環境は人物を生む」という言葉がある。果して当時のこの鹿沼が偉人石橋先生を生み出すに適な条件を具備せし所であろうか。明治維新幾多の英才将帥を輩出せしめた南欧ナポリの称を有する鹿児島、国際関係に於て常に緊張せし長州等の環境に於て卓越するに比し、必ずしも鹿沼は勝れりとは考えられない。蓋しこれ等の歴史的必然性も真にその人材を得ざればたゞ一條の空文に等しい。凡そ歴史上に勇躍せし偉人の全てが富貴も淫する能わず、貧賤も遷す能わず、威武も屈する能わざる大丈夫であった。が然し亦如何なる聖賢偉人たり、100 年の聖鑑たりと雖も、玉琢かざれば器をなさず、人学ばざれば道を知らず、実に千古の良器も、風に櫛

けずり、雨に沐するの至誠努力の実践的 4 字なかりせば、その大成は空想にすぎないであらう。

昭憲皇太后の御歌に

金剛石も磨かすば

玉の光りは添はざらん

と述べさせ給える如く、萬年の竹帛に千古不朽の名を飾る聖賢偉人の全てが、皆この 4 字の蓄積された結果に外ならないのである。真にこれ精勤退かざれば一念天に通ずとやら、如何なる艱難にも打ち勝つ努力こそ大願成就の根源である。

### ○その父母

さて我等が師石橋先生はこの鹿沼宿の田町通りと内町通りの中間、現在の大日如来堂の近くの地、当時の石橋の里に生れた。これと言う自然の恩恵にも、藩侯という社会的な恩恵にも恵まれずに……………。

記録は父を三郎兵衛、母を喜与子と伝えている。父三郎兵衛は代々農を営み、又大阪屋と号して宿場及其その在方を対象とせるよろず雑貨商を営み、宿揚町にあり勝な半農半商であった。累世の豪家にして、農業には数多の作男を使用し、商事には番頭、手代を置きしもの如くである。碩学藤田一正はその墓表に記して曰く「家世農を以て業とし、鹿沼石橋の里に居る。財を以て邑豪たり」と。又「自称と号し、頗る読書を好み、易筮を曉る」と記せる如く、代々蔵書多く、千巻の書を積み、孜々として勉学を怠らず、殊に易学に詳しく、遠近に聞えた漢学者であった様である。先生もその著勸学文の中に「寒郷の乏にして二西五車の富を欠くと雖も、家君庫蔵する所の数百千巻」と記している。かかる大部の蔵書が、当時の書籍普及困難の時代に於て僅か父翁一代の蓄積とは勿論考えられないので、少くとも家世累代学を好みし結果と考うる事は妥当であろう。京の碩学伊藤東崖は元文元年の急逝であり、先生の家翁との間に何等の時代的交渉を有せざるも、先生の妻の兄鈴木与右衛門に宛てたる書翰は幾通も蔵せられて居り、鈴木家一族の篤学を雄弁に物語っておる。而も後年先生口を極めてその父翁を

賞揚せる如く、たゞ単なる一介の象牙の塔に籠れる学徒に非ずして、極めて慈悲心に富んだ所謂彼の言う「惻隱の情」に溢れたる大徳であった。後年先生故山を後にして昌平校に入学せし事も、帰郷私塾を開きて郷党子弟を教育し、其他諸種の社会事業、教化事業等に尽粹せし事もこれ全く家翁の命であり、又少くとも家翁の志を渴仰継承せし結果なのである。この意味に於て家翁は先生の種子であり、榮養であり、又絶対的な崇拜の対象たる偶像でもあった。

次に母喜与子は前述せし鈴木与右衛門の妹に当り、その生家は現在の鹿沼相互金庫の裏附近との事である。又累世好学の家であったため、恐らくその躰も代表的な徳川時代の儒教式な賢夫人なりし事は想像するに難くはないが、残念ながら何等記録の存するものなく、又その鈴木家にある僅か4ヶ年、先生五歳の時他界せしたため、何等の口碑も伝えず、先生も亦その数ある遺稿中母に対する追憶の一文も存しない。

## 本書目次

口絵／序文／自序／先生鹿沼に生る／その父母／修養時代／先生江戸遊学に上る／所謂学問すること／当時の昌平坂学問所／朱子学／先生仰高門の講授に挙げらる／先生帰郷す／開塾／麗澤之舎と当時の私塾の状態／麗澤之舎の門下高足／先生と君平／当時の農民状態／先生と恤救事業／教化事業／家翁永眠す／永（栄）寿との結婚／藩侯先生に扶持米を与う／晩年／逝去／結び／徳は孤ならず／その遺稿／年表



## あとがき

私はいわゆる登山愛好家である。しかし、世界の山々をめざそうとか、日本百名山とかを目指すつもりはないし、強いて言えば興味がない。あえて言うなら、私は旅愛好家であり、鹿沼三十三観音を巡ったり、あるいは鹿沼三十三名山を選定して登ってみたいと思う。そして自分が生まれ育った鹿沼の山々にある植物などの自然を知りたいと思う。しかし、それはいつでもできるであろう。僕が今知りたいのは、自分の生まれ育った鹿沼で、一生けんめい生きぬいた人たちの生きざまである。歳を重ねてくると、自分の残り時間を惜しむことよりも、何とか生きぬいて自分の一生をまっとうしたいという思いが芽生えてくる。鹿沼でがんばって生きぬいた先人たちに、私は学びたいと思う。(阿部良司)



### 小さな旅クラブ 6月までの予定

- 4月5日(日) 上州、子持山 子持神社
- 4月12日(日) 鹿沼三十三名山・三ノ宿山(1229m、いちに肉)～大木戸山(1286m、いちにハム) 清滝寺、清滝神社
- 4月19日(日) 日光、鳴虫山 浄光寺、観音寺 アカヤシオ
- 5月3日(日) 奥多摩、川苔山 奥氷川神社
- 5月5日(火) 安蘇、三滝より氷室山 鹿一瓶塚稲荷神社
- 5月10日(日) 日光、隠れ三滝と大山 ズミ、トウゴクミツバツツジ
- 5月17日(日) 秩父、両神山 秩父神社
- 6月7日(日) 会津、田代山 オサバグサ
- 6月14日(日) 西上州、史跡巡りとグルメ旅  
富岡・富岡製糸場、一之宮貫前神社、妙義神社(社殿の背後にそそり立つ大岩壁)、下仁田・常住寺、安養山清泉寺、中之岳神社
- 6月21日(日) 日光、太郎山 アズマジャクナゲ

☞ 本号の内容 ☜

ふるさとに咲く——鈴木石橋の生涯——	2
蘭華第八号「鈴木石橋先生」	15
あとがき	19
小さな旅クラブ 6月までの予定	19



鹿沼に生きた人、生きている本・第2号

2020年4月発行

小さな旅クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail tw244873@jg8.so-net.ne.jp